巻頭言

静かな怒りを持続させよう

高　原　孝　生
（PRIME 所長）

昨年の PRIME の巻頭言のタイトルを、ANNUS HORRIBILIS おそるべき年、とした。この一年を振り返り、その思いはいっそう増すばかりである。

国家による武力行使の自己抑制が緩み、また武器が非国家主体の手にもほとんど無制約に渡ってしまっているのが、今われわれの直面する世界である。その下で恐るべき人道上の危機が起きており、それはいずれ他人事でなくなるかもしれない。他方で、世界には、この流れを逆転させようと努力を続けている人々がいる。あらゆる機会をとらえて、その人々と手を結び、対抗動向を力づけなくてはならないときに、わが国の政府は、いったいどちらを向いているのだろうか。

特定秘密保護法、日米新ガイドライン、集団的自衛権行使容認の閣議決定、憲法違反の新安保法制、辺野古新基地建設強行、武器輸出解禁、原発輸出推進、原発再稼働、労働者派遣法改悪、国民総背番号制（「マイナンバー」制度）導入…これらの多くは、明確に民意をふみにじるかたちで強行されたのであり、あるいはされつつある。戦後、まがりなりにも築いてきた希有な国のかたちを、今の政治は次々と壊し続けている。しかも、自由、民主、法の支配、美しい国などといった言葉を振りまきながら、詐術と恫喝といえるような方法によって。

ある作家は、「（現政権の）全域をつらぬく人間蔑視、弱者・貧者さげすみ、強者礼賛、あられもない戦争衝動、『知』の否定、財界すりより、ゼノフォビア、夜郎自大、組織的大衆操作、天皇制利用…が堪えがたい段階にまできている」と怒りを爆発させている。

たしかに、恐ろしいと嘆くにとどまらず、怒るべきときだ。平和が本当の平和であるためには、そこで正義がないがしろにされてはならない。静かに怒りを持続させ、エネルギーに変えよう。そして、本当の悪と対決しなくてはならない。

本当の悪は、悪の顔をしていない。悪魔は年を取っている。だからわれわれは必死になって賢くならねばならない。うわべだけの耳障りのよい言葉にだまされず、為政者の行動とその結果を、しっかりと記憶にとどめよう。「どうせ国民はすぐ忘れるから」と、彼等にうそぶかせてはいけない。

そして、悪魔は勤勉だ。われわれは負けずに平和を学ばなくてはならない。立場を超えて語り合い、互いに理解を深め、みずからを変革することができるような場を、大学はもちろん、社会のさまざまなところで確保し、広めていこう。われわれ全員と未来の世代の「いのち」が危機にある核時代に、むざむざと愚行を許す余裕はない。

本号の二つの特集は、いずれもそうした意味でわれわれの知が試されている課題領域である。所収の論考が読者の思考を刺激するものになれば、これにすぐる歓びはない。